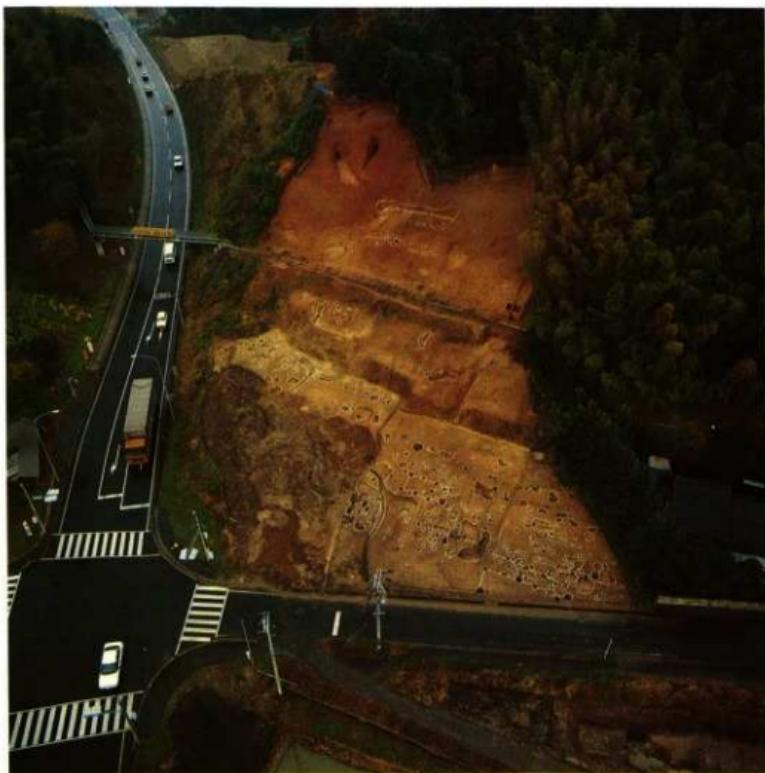


一般国道9号松江道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査概報
(中竹矢遺跡)



1991年3月

〔国道工事事務所
教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして松江道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当松江道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の御協力のもとに昭和50年度以降現在まで4億5千万円の費用を投じ発掘調査を実施してきています。

本報告書は、平成2年度に実施した中竹矢遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められることへの御理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導御協力頂いた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成3年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 菅原信二

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託をうけて、平成2年度に一般国道9号松江道路建設予定地内の中竹矢遺跡の調査を実施しました。

松江道路の調査は、昭和50年度から昭和57年度にかけて現在供用されている二車線部分の調査を行ない、昭和61年度からは車線拡幅に伴う調査を実施しております。本年度の調査区は昭和55・56年度の隣接地にあたり、弥生時代から近世にかけての集落跡を検出しました。特に平安時代の瓦窯跡は隣接する出雲国分寺瓦窯跡とともに、出雲国分寺、出雲国分尼寺で使用した瓦を焼いた窯ということで貴重な発見となりました。本報告が、広く埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに多少なりとも役立てば幸いです。

なお、調査にあたりご協力頂きました建設省松江国道工事事務所をはじめ関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

島根県教育委員会教育長

原田俊夫

例 言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成2年度に実施した一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査概報である。

2. 本年度は、中竹矢遺跡の発掘調査を実施し、発掘地は次のとおりである。

中竹矢遺跡——島根県松江市竹矢町字畠廻674-2他

3. 調査組織は次のとおりである。

事務局 泉 恒雄（文化課長）、藤原義光（同課長補佐）、勝部 昭（同課長補佐）、野村純一（文化係長）、坂根 繁（文化係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）

調査員 宮沢明久（埋蔵文化財第一係長）、広江耕史（文化課主事）、藤井和久（兼主事）、津森 敏（兼主事）

調査指導者 山本 清（島根県文化財保護審議会委員）、池田満雄（同）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、金子浩昌（早稲田大学教育学部講師）

遺物整埋 三島千富美、横山知子、青井国江、加納里香、三島 豊

4. 本書で使用した造構略号は次のとおりである。

S D-溝、S B-掘立柱建物跡、S K-土壙、P-ピット

5. 本書で使用した方位は磁北を示す。

6. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区配図」は建設省松江国道工事事務所作成のものを淨書して使用した。

7. 本遺跡出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。



I 位置と環境

中竹矢遺跡は、松江市街地の南東、松江市竹矢町中竹矢字畠廻に所在する遺跡で、水田と丘陵及びその斜面から成っている。丘陵上からは、南方に出雲地方でも有数の穀倉地帯である意宇川下流域の水田地帯が眼下に広がっている。

昭和55・56年の調査では、弥生時代の土壙のほか、古墳、横穴墓、奈良・平安時代の建物跡などを検出している。

周辺には、縄文時代の遺跡としては、さっべき遺跡や才塚遺跡、保地遺跡などがあるほか、旧竹矢小学校校庭遺跡からは石斧も出土している。

弥生時代に入ると、南東に隣接する布田遺跡では前期から中期の溝状遺構を中心として土壙や住居跡などが検出されている。また上小紋遺跡や向小紋遺跡、夫敷遺跡からは後期の水田跡が検出されている。

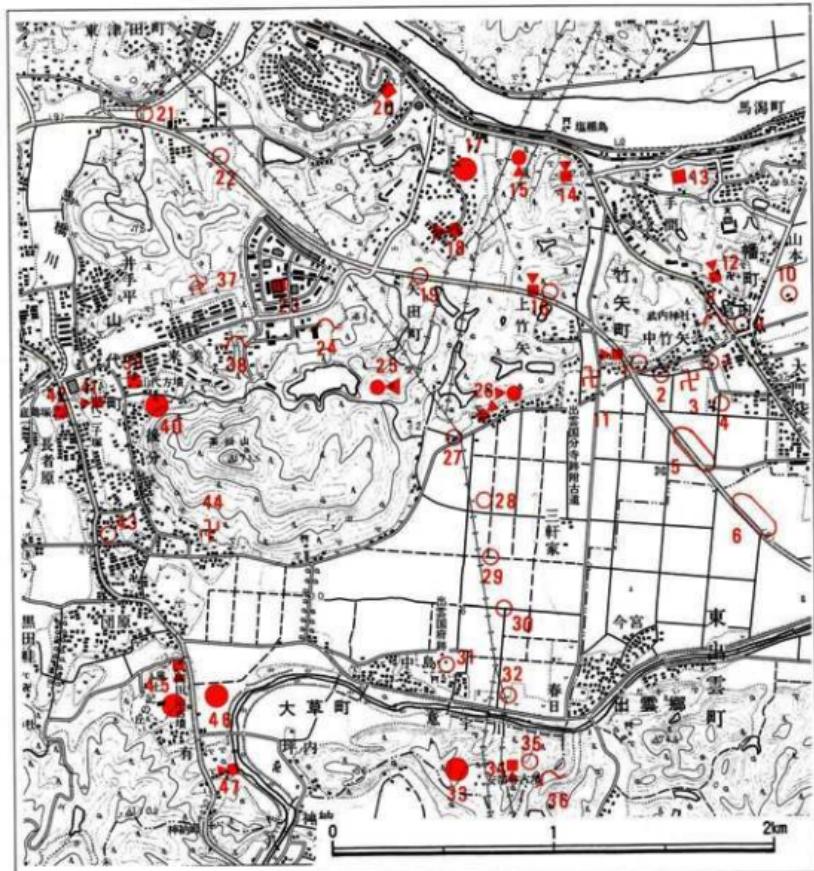
古墳時代になると、中期に大橋川南岸や意宇平野北縁部の丘陵上に、比較的大形の古墳が多数築かれている。石室古墳（方墳・40×39m）、井ノ奥4号墳（前方後円墳・全長約57.5m）、竹矢岩舟古墳（前方後方墳・全長50m）、手間古墳（前方後円墳・全長約70m）などがある。後期になると、横穴式石室をもつ岡田山古墳（前方後方墳・全長約24m）や御崎山古墳（前方後方墳・全長約40m）などが築造されている。また、石棺式石室を伴う古墳として古天神古墳（前方後方墳・全長約25m）、岩屋後古墳（原形不明）、山代方墳（一辺45m）などが出現する。そして、ほぼ時期を同じくして、ト工免横穴群、狐谷横穴群、安部谷横穴群などといった大規模な横穴墓群が、意宇平野周辺部の丘陵斜面に点在している。

また、北西部には掘立柱建物跡と多数の祭祀遺物が出土したオノ岬遺跡があり、平安時代まで営まれている。

律令時代には、西側に出雲国分寺、東側に出雲国分尼寺が造営され、これらの寺院で使用した瓦を焼いたと考えられる窯跡も東側に隣接してある。また意宇平野の南側中央付近には出雲国庁が置かれ、この地域が出雲国の政治・文化の中心地であった。

参考文献

『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I』島根県教育委員会 1976年	IV】 同 1983年	【
【 同 上	IV】 同 1983年	】
『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 VIII』同 1990年		



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 中竹矢遺跡・中竹矢1号墳
2. 出雲国分寺瓦窯跡
3. 出雲国分尼寺跡
4. 宮内遺跡
5. 布田遺跡
6. 夫敷遺跡
7. 平浜八幡宮前遺跡
8. 代官家後横穴群
9. 的場土壙墓
10. さっぺい遺跡
11. 出雲国分寺跡
12. 迎接寺古墳群
13. 灏山古墳
14. 竹矢岩舟古墳
15. 手間古墳
16. 才ノ峠遺跡・才ノ峠1号墳
17. 井ノ奥古墳群
18. 井ノ奥4号墳
19. 平所遺跡
20. 石屋古墳
21. 石台遺跡
22. 勝負遺跡
23. 来美墳丘墓
24. 十王免横穴群
25. 週田古墳
26. 上竹矢古墳群
27. 間内遺跡
28. 上小紋遺跡
29. 四配田遺跡
30. 神田遺跡
31. 出雲国跡
32. 大屋敷遺跡
33. 百塚山古墳群
34. 古天神古墳
35. 天満谷遺跡
36. 安部谷横穴群
37. 来美廃寺
38. 狐谷横穴群
39. 山代方墳
40. 山代円墳
41. 山代二子塚
42. 大庭鷦鷯塚
43. 山代獨正倉跡
44. 四王寺跡
45. 岡田山古墳群
46. 岩屋後古墳
47. 御崎山古墳

II 調査に至る経緯

今回の中竹矢遺跡の調査は、昭和55・56年に行った暫定道路部分に隣接する4車線の本道工部分について実施した。

国道9号線松江東バイパスは、6車線が計画されており、昭和57年に行われた島根県主要幹道として供用するために、55・56年の2ヵ年にわたって計7遺跡（春日遺跡・夫敷遺跡・布田遺跡・中竹矢遺跡・才ノ岬遺跡・勝負遺跡・石台遺跡）の調査を行った。

その後、60年度に建設省から国道9号線松江東バイパスの残り4車線の本道工部分の調査依頼があり、協議の結果、61年度に春日遺跡から調査を行った。

本年度は、本道工部分の調査に入り5年目であり、一般国道9号松江道路のルート内の中竹矢遺跡の調査を行うことになった。

III 調査の経過

今年度の調査は、前回の調査と同様に調査をI～V区に設定した。

第I調査区は、a～eの5区に分けた。5月8日から、道路工事残土による盛上除去を行ないその後、9月26日から表土掘削を開始した。遺構精査は、d区から着手し、土壌などを検出した。11月27日にバルーンにより空中写真の撮影を行い調査を終了した。

第II調査区は、7月31日から表土掘削を行い、8月6日より遺構の検出を行う。調査区の南側に黒色土の遺物包含層が堆積しており、瓦、須恵器が多く出土する。黒色土を除去し、地表面にて、柱穴を検出する。11月27日に空中写真を撮影し、調査を終了した。

第III調査区は、5月7日より地形測量を行い、5月14日より表土除去を行う。6月18日に横穴を確認し、墓道から検出を行う。7月31日から3号穴の玄室内に流入した土を除去する。8月7日より4号穴の玄室内の流入土を除去する。8月27日より3・4号穴の間の穴（5号穴）を検出する。

9月25日に調査区の南東隅において土壌のプランを確認する。壁の一部が焼けており、中から瓦が出土し瓦窯跡であることを確認する。12月18日に現状のまま埋めもどし調査を終了する。

第IV調査区は、8月3日から表土除去のみを行う。11月27日より遺構の精査を行い柱穴等を検出する。12月21日に実測を行い、調査を終了する。

第V調査区は、5月21日より表土除去を行い、7月5日に西壁に沿ってトレンチを入れる。7月6日に測量を行って調査を終了する。

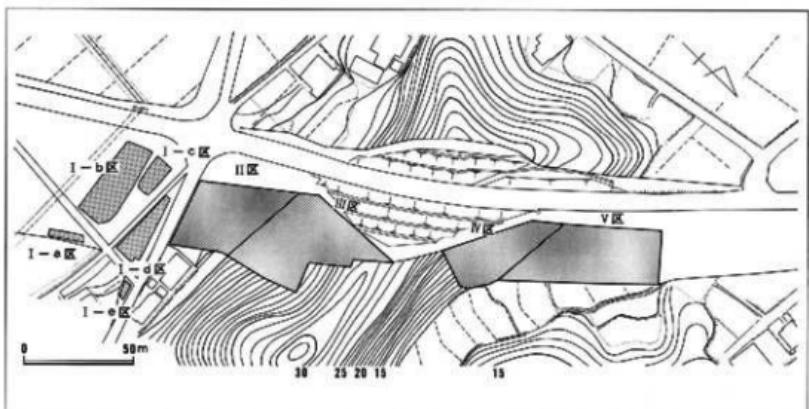
IV 調査の概要

今回の調査では、主として第I調査区で弥生時代～古墳時代前期の遺物と土壤群を検出し、第II調査区では柱穴を約200検出した。また、第III調査区のほぼ中央部で平安時代の掘立柱建物跡、中央南側の溝に囲まれた部分で近世初頭の柱穴を検出した。第IV調査区では、古墳時代後期の横穴、平安時代の建物跡、第V調査区で平安時代の建物跡を検出している。

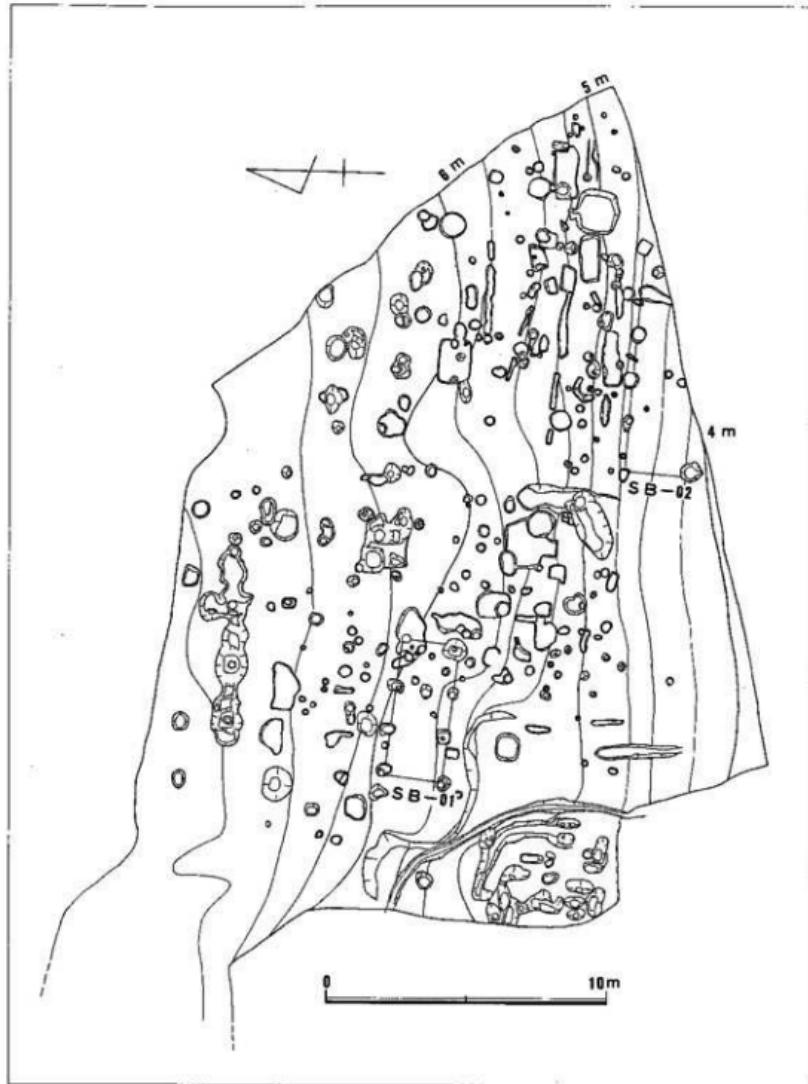
第III調査区で検出した瓦窯跡は標高12mの丘陵斜面に位置し、構造は平窯で、焚口と焼成室が見つかっており、焼成室の天井部は残っていないかった。出雲国分寺、国分尼寺で使われた瓦を焼いていたと思われる。瓦窯の時期は、出土した須恵器と軒平瓦の模様から、平安時代と思われる。この瓦窯と併行する時期の遺構として、第II調査区で掘立柱建物跡を検出した。

第III調査区の横穴は、丘陵部の南側斜面で2つ検出した。3号横穴は、幅約2.5m、長さ約10mの幅広の長い前部を持ち、玄室は家形を呈し、屍床が作られていた。出土した遺物などから7世紀末～8世紀初頭のものと思われる。4号横穴は、幅約2m・長さ約7mの細長い前部を持ち、玄門部に閉塞石が置かれていた。出土した遺物から6世紀後半のものと思われる。なお、これらの横穴は近世初頭に再利用されており、3号横穴・4号横穴をトンネル状につないだ5号穴では祈禱などの祭祀が行われていたと思われる。

第IV調査区の建物は、第II調査区より後の時代のものであると思われる。出土した遺物から平安時代後期のものと思われる。柱穴も小さなものであった。



第2図 中竹矢遺跡・調査区位置図



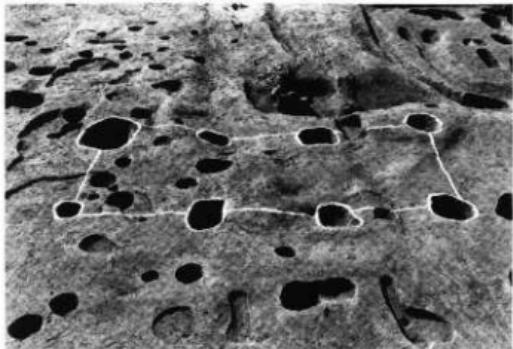
第3図 第II調査区全体図

1. 第I調査区

第I調査区は便宜上、南側からI-a、b、c、d、e区と呼称することとした。

ここでは、a、c区の白色粘土の基盤層から土壤87を検出した。その性格は不明であるが、弥生時代前期・中期、古墳時代前期の土器が出土している。

d区は丘陵部から水田部へと移る部分であり、調査区南側で1.5mの段差がついている。これからは大量の瓦が出土した。これらの瓦は破損したものがほとんどで、焼成の不良なものや溶着したものも含まれ、d区の北側に位置する国分寺瓦窯跡から出た不良品等を廃棄した場所と考えられる。



図版1 第II区、SB-01(北より)



図版2 第II区出土遺物(須恵器)

2. 第II調査区

第II調査区は丘陵南側斜面の下部で、標高差3m足らずの緩やかな傾斜面である。ここでは、200余のビットが検出された。調査区の中央において平安時代の建物跡(SB-01)を検出し、南端からも建物跡(SB-02)を検出した。また、中央南側においては溝に閉まれた近世初頭の柱穴を、西側では、近・現代の柱穴を検出した。SB-01は、全体が残る掘立柱建物で、規模は1.8m×4.8mと小さなものである。SB-02も掘立柱建物跡である。南側と東側の2辺を欠いており、全体の規模は不明であるが、検出した2辺は2.4m×5.0mの規模を持ち、北側には雨落ちと思われる溝を検出している。

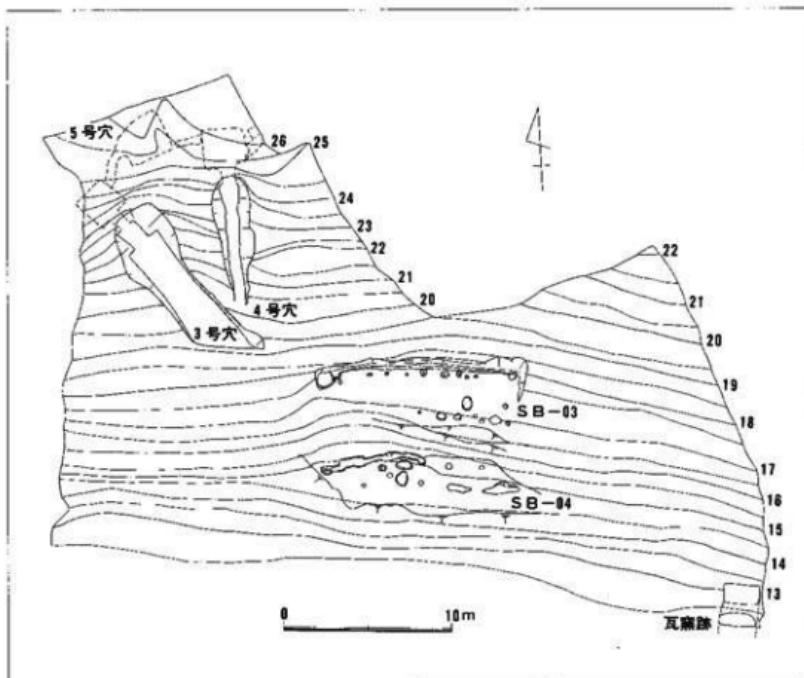
この調査区の南東端を中心として、平安時代の瓦・須恵器・土師器が出土した。また、中央南側の柱穴付近から近世初頭の軒津焼が出土した。さらに、中央付近の土壌からは、貨幣と人間の歯が出土しており、これらは近世初頭の墓であったと思われる。

第III調査区・SB-03、04(第4図)

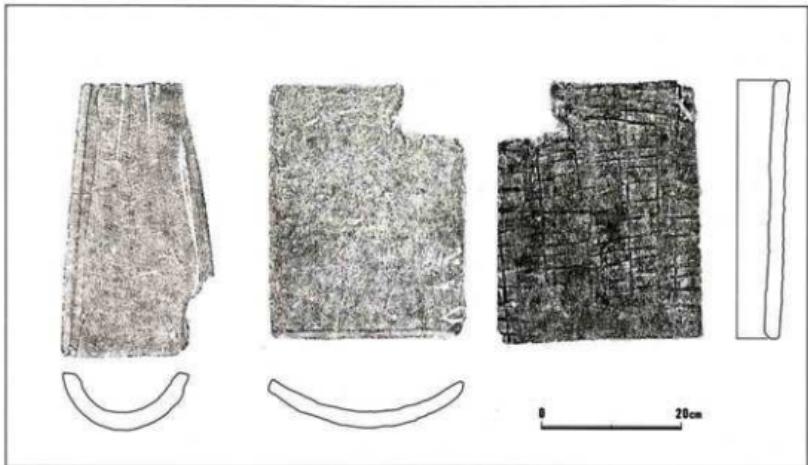
第III調査区の中央部・標高15~19mの斜面を平坦に加工し、上下2段に掘立柱建物を築いている。SB-02は、加工段の残存長12.6m、幅4mを測る。加工段の山側の柱穴は一列に並んでいるが、谷側は並びが明確ではなく、建物の規模は不明である。SB-03は、柱穴の残りが悪く建物の規模は不明である。SB-02、03とも出土遺物は少量で須恵器、瓦が出土している。

瓦窯跡(第5図、図版2)

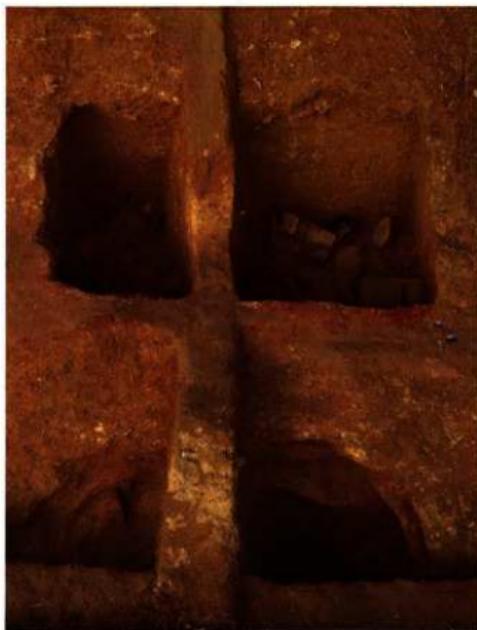
第III調査区の南東隅の標高13mの斜面に築かれている平窯である。焚口と焼成室が残っており、焼成室の天井部は残っていないかった。焼成室は、幅2.0m、長さ1.1m、深さ1.3mを測り、四壁はほぼ垂直に立ち上がっている。焼成室の中は、下部に焼土が上部に暗褐色土、黄褐色土が入り、瓦が多量に入っている。焚口は、焼成室と同様の幅で床面は50cm程低くなっている。焚口も下部に焼土が、床面上に炭化物の層が堆積している。焼成室の中からは、平瓦、丸瓦、軒平瓦、須恵器・壺・壺が出土し、それらの時期は平安時代と思われる。



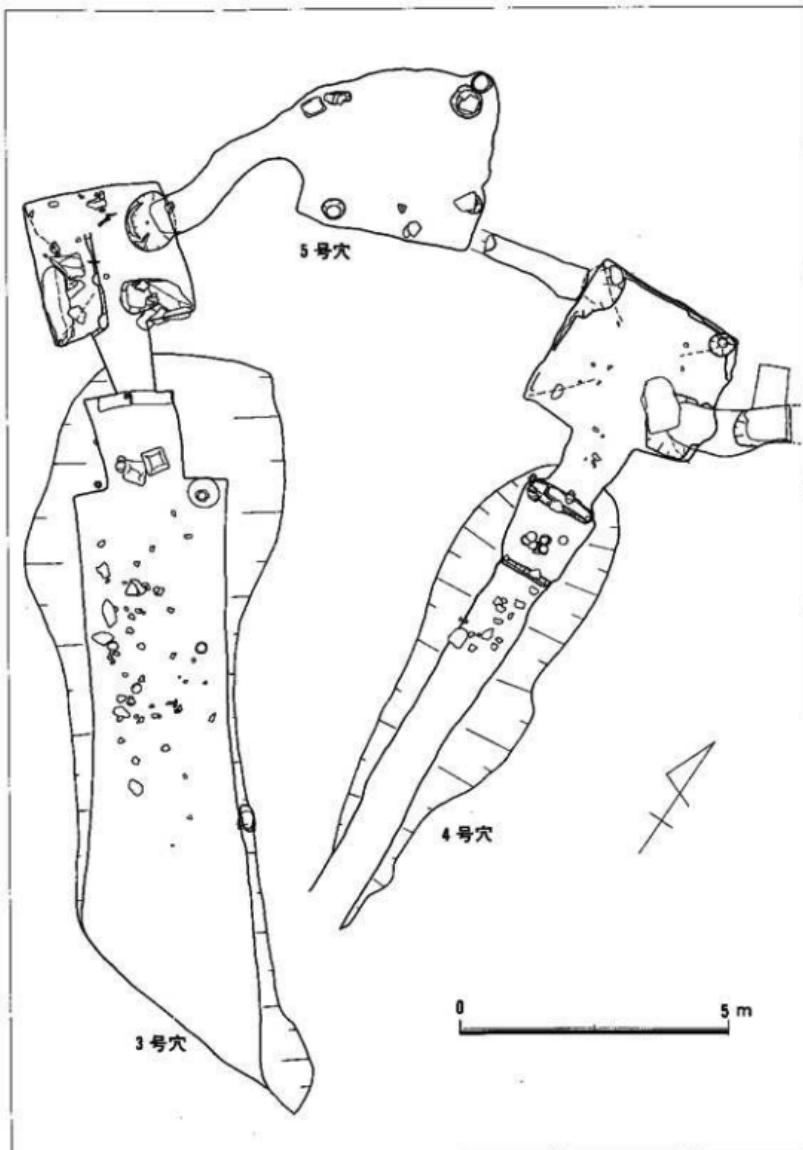
第4図 第III調査区全体図



第5図 瓦窯跡出土遺物



図版3 瓦窯跡



第6図 3・4・5号穴位置図



図版4 III区3・4号横穴（南より）



図版5 3号横穴



図版6 3号横穴前庭部遺物出土状況

・3号横穴

調査区北西隅にあり、丘陵部南斜面に穿たれている。玄室及び墓道の主軸方位はN-40°-Wで、南東方向に開口しており、玄室床面の標高は19.9mである。墓道は南東端から羨門までの長さ8.3m、幅2.0～2.5mを測り、羨門は間口1.1m、奥行1.3mを測る。羨道は床幅0.5～0.8m、高さ1.0mを測り、天井部が逆U字形を呈している。

玄室は奥行2.1m、幅2.1m、高さ1.7mを測り、家型を呈している。ただし、後世に幅15cmほどの工具で内部前面にわたって削られており、その原状は明確ではない。床面中央には、主軸に沿って深さ5cm、幅4cmの溝が掘ってあり、内部西側が幅90cmにわたって、8cmほど高くなっている。これは屍床と思われる。

東側奥には、後世に穿たれた5号穴へのトンネル状の通路が開口しており、直径80cm、玄室床面からの深さ55cmを測る。また、東側前隅にも後世に掘られた穴を検出したが、これは納骨穴と思われ、穴の上に五輪塔の一部と思われる石が置かれていた。玄室内からは若い牛の骨も出土しており、この横穴が近世初頭に、何らかの形で再利用されていたことがわかる。

出土遺物（第7図1～3）

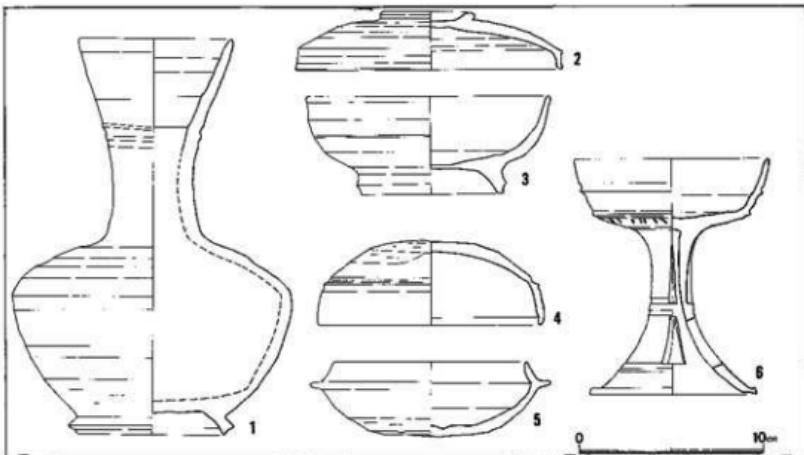
3号穴の前部から、須恵器壺身・蓋、壺1、甕1、土師器・甕1が出土している。第7図1は、長頸甕で高台が付き、頸部中程に2条の沈線が入る。器高は21.5cm、口径8.4cm、底径8.0cmを測る。2は、壺・蓋で天井部に輪状つまみが付き、天井部外面は静止糸切りの後をナデている。3は、高台付きの壺・身で、口径13.2cm、底径7.8cm、器高5.3cmを測る。底部外面は静止糸切りの後をナデしている。これらの須恵器の時期は7世紀末～8世紀初頭と思われる。

・4号横穴

調査区北西隅、3号横穴の東に、開口部が隣接する形で穿たれている。玄室及び墓道の主軸方位はN-3°-Wで、ほぼ南北の軸線に沿っており、南方向に開口している。玄室床面の標高は21.1mを測る。

墓道は長さ7.12m、幅0.7～1.2mを測り、羨門部は間口0.7m、奥行0.9mを測る。羨道は、床幅0.7～0.9m、高さ0.9mで、床面がU字形を呈している。羨道入口には閉塞石が立てられていたが、上部半分は破損し、玄室内に入り込んでいた。

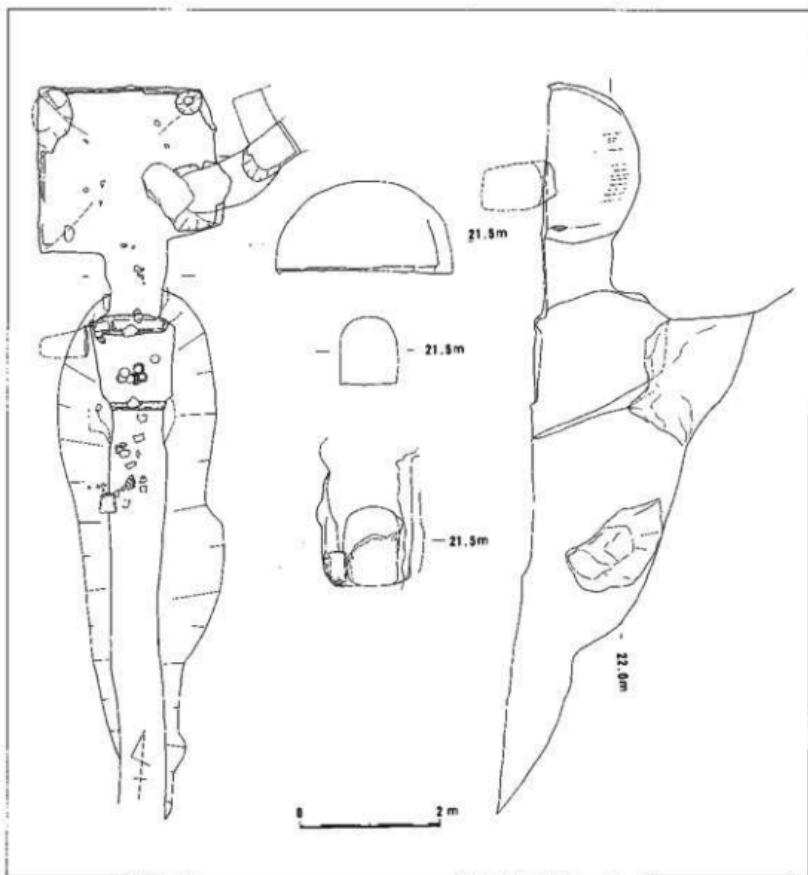
玄室は、幅2.6m、奥行2.4m、高さ1.3mを測り、丸天井型を呈している。玄室西側奥隅には、5号穴との通路が開口している。これは幅94cmで、玄室床面からの深さ54cmを測る。また、東側前隅にも東北方向へ伸びるトンネル状の穴が穿たれており、調査区外へと続いている。この穴は、最大幅1.2m、高さ1.7mを測る。玄室の天井部は、煤で汚れており、5号穴との通路の開口部付近にも灰が堆積していた。玄室内で、近世の陶磁器が出土している。



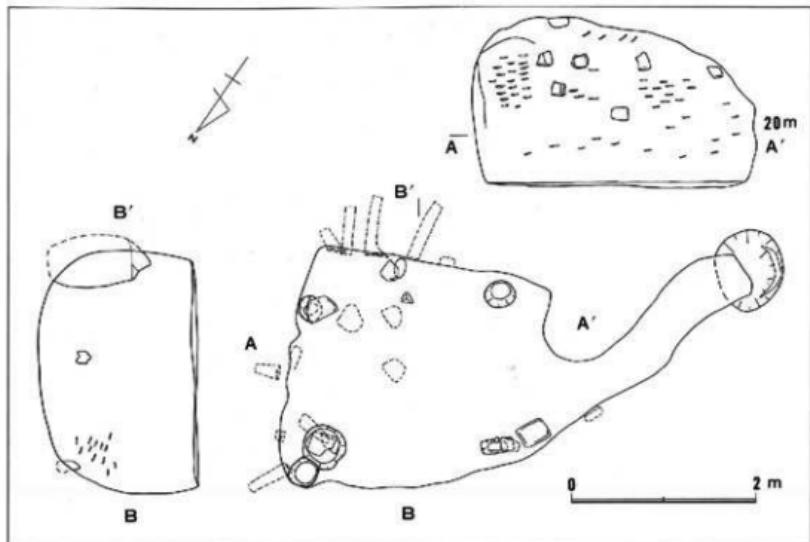
第7図 3・4号穴出土遺物実測図

出土遺物（第74～6）

4号横穴からは、閉塞石の前の部分より須恵器・蓋環4セットと高坏1が出土している。4は、环・蓋で天井部と口縁部の境に2条の沈線を入れ稜を作り出している。口唇内面は沈線状に凹んでいる。天井外面には回転ヘラケズリが施されている。口径12.3cm、器高4.6cmを測る。5は、坏・身で立ち上がりが内傾し、底部外面にヘラケズリを施す。口径10.4cm、受部径13.2cm、器高4.0cmを測る。6は高坏で脚部の上下2段に3方向のスカシを施している。口径10.5cm、器高12.8cmを測る。これらの須恵器の時期は、山陰III期、6世紀後半頃と思われる。



第8図 4号横穴実測図



第9図 5号穴実測図



図版7 第III区 5号穴内部、東壁

・5号穴

5号穴は、3号横穴玄室と4号横穴玄室の間に位置する床の平面形がほぼ方形を呈する穴で、トンネル状の通路で3・4号横穴と結ばれている。3号横穴玄室床面と5号穴床面との比高差は50cm、4号横穴との比高差は1.7mである。

3号横穴との通路は主軸方位

N-25°-Eで長さ2.8m、幅0.5

m、高さ0.8mを測り、5号穴内の開口部は5号穴西北隅の床面に沿う。5号穴の主軸方位はN-60°-Eでこの通路からやや西にふれている。また、4号横穴との通路は長さ1.6m、幅0.3m、高さ0.4mを測る。この通路の主軸方位はN-84°-Eで、5号穴内の開口部は東南隅の床面から44cm上の壁面に穿たれている。5号穴は、幅2.6m、奥行2.6m、高さ1.8mを測る。四隅には納骨穴らしいものがあった。壁面には、はっきりとした加工痕が残り、下から50cmほどの高さまで、朱で彩色され

ていたようである。

5号穴に伴う遺物（図版5）

1、3は3号穴墓道より、2は3号穴から5号穴への通路、4は4号穴より出土している。

1は、中国製の白磁碗の高台部分で、時期は平安時代後半と思われる。2は、青磁の皿と思われ、内底に砂目痕が残る。3は、唐津焼の皿で釉が緑灰色を呈す。4は青磁・碗の高台部分である。2～4の時期は、江戸時代初めの頃と思われる。



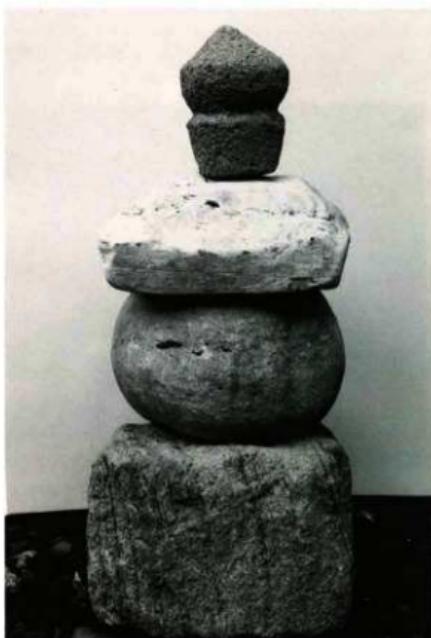
図版8 5号穴出土陶磁器

第IV調査区（第10図）

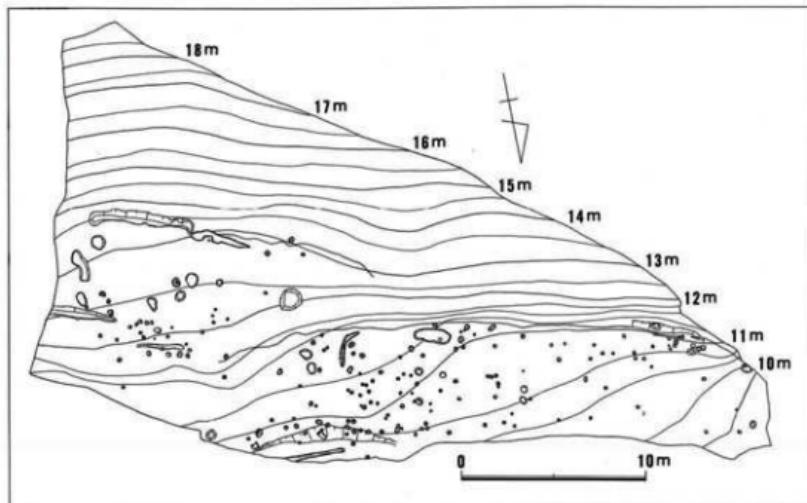
丘陵部の北側斜面と幅10mの平坦面からなり、平坦面に径10～15cmの柱穴が掘り込まれている。西端には溝が掘られており、掘立柱建物の一部と思われるが、建物の規模は不明である。この付近より、土師質土器の小皿、白磁碗が出土している。白磁碗（図版7）は、小さな玉縁の付く太宰府編年II類とされるもので、時期は11世紀と思われる。調査区の中央には、加工段が作り出されており、ここより奈良時代の須恵器の壺が出土している。

第V調査区

第IV区の北側の谷部が第V調査区で水田部分となっている。水田の耕作土の下は暗灰色、白色粘土の基盤層となり、暗灰色の土中より土師質土器が出土している。遺構は検出していない。



図版9 5号穴出土五輪塔



第10図 第IV調査区全体

V む す び

今回の調査では、主に丘陵部のII・III区において遺構を検出した。III区の瓦窯跡は平安時代の平窯で從来知られていた国分寺瓦窯と20m離れており、その間にも窯跡の存在が想定される。この窯跡と同時期にはII区に掘立柱建物があったようである。I-d区は、国分寺瓦窯跡の灰原の一部と思われ多量の瓦が出土している。これらの瓦窯で使用された粘土は、I-a, b, c, d区において採掘されていたようである。III区の横穴は、4号穴の玄室が丸天井で6世紀末、3号穴が家形で7世紀末～8世紀前半という時期であり、前回の1、2号穴を含め横穴の時期的な形態変化が判明した。3・4号穴は近世に再利用され、両方の横穴を連結するトンネルを掘り、その中間に別の部屋（5号穴）を作り、埋葬と祭祀に使われていたようである。用途としては、矢倉的な性格もあると思われる。この時期の建物はII区において検出している。今回の調査で弥生時代以降の集落と墓地の様相を知る資料が得られた。



図版10 第IV区出土陶磁器

平成3年3月発行

一般国道9号松江道路建設予定地内
埋蔵文化財調査概報
(中竹矢遺跡)

編集・発行 島根県教育委員会

〒690 松江市殿町1番地

印刷・製本 株式会社 報光社